

## 編集委員会便り

盛夏の候の特集号ということで、今回は、“冷熱技術”をお届けいたしましょう。もっとも、白状しますと、私の企画立案が手間取った結果が、たまたまこういうタイミングになったということでもあります。

さて、本会誌はこれまでに60を超える多数の興味深いテーマについて特集を組み、好評を博してきました。これらの特集記事は、エネルギーと資源に関連した実に広範な課題を扱っていますが、冷熱技術全般にわたって、これを真正面からとりあげようとしたのは、今回が初めてです。

一般にそうであるように、冷熱技術にも冷熱をつくり出す技術と、これを利用する技術との二つの側面があり、それぞれに活発な研究開発がなされておりますので、一つの特集で網羅するのはとても不可能なくらいに間口も広く、また深遠でもあります。わが国はこの方面でも、世界をリードする高度な技術の創出を展開しつつあるのはまことにご同慶の至りではありますが、これらの中から少数の技術を選択し、ご紹介することは私には至難の術と思われました。幸い、林宗明編集委員長長の軽妙にして正鵠を得たご判断と、熱意に満ちた編集委員各位のご協力によりまして本特集が設定できましたことを記させて頂き、感謝の意を表したいと思います。

今世紀に入ってから百年も経たない間に、多種多様の冷熱発生技術が考案され、実現のために工夫がなされてきました。その結果、冷房のような温度幅の小さな場合から、絶対零度に迫る極低温までの種々の温度レベルで冷熱利用が広まっているのはご承知のとうり

であります。それは工業はもとより、医学、流通、そして生活環境全般に関わっています。このように、今日の文明社会を支えている大きな柱の一つであるといっても過言ではない冷熱技術に、どのような可能性が見出だされようとしているのかを知りたいと思うのは、編集に携わるわれわれだけではないでしょう。

冷熱技術の周辺には、これを新しい世紀に向けて大きく脱皮させる要因となりうるものが渦巻いているように思われます。これらは、フロン問題を克服した技術を生み出すほか、ますます多様化するであろうクライオシステムをいっそう洗練させ、普及させるに違いありません。その動向がウォッチできる材料は、今後、本誌に登場する機会が増えてくることでしょう。

執筆をご快諾くださいました著者の皆様方と、企画の実現に当たって大変お骨折り頂きました磯谷文之輔(大阪瓦斯)、野田浩男(クボタ)、関矢英士(東芝)、田中光雄(三菱電機)の各編集委員にお礼を申し上げます。

ところで、本特集にご寄稿願った『DDHP』が、エネルギー・資源学会第3回技術賞を受賞することになりました。あらかじめお願いしていた特集記事が、同じ号の会誌で技術賞の内容紹介記事になるという巡り合わせは、滅多に起こらないことであろうと思います。偶然とはいえ、いささか驚きました。本特集に華を添えてくださったことを受賞者の方々に感謝しますとともに、心からお慶びを申し上げる次第です。

世古口言彦  
(大阪大学工学部教授)